



On the Steps の今年は四人のアーティストに絞られた。一色映理子(1981-)は2005年から個展を開催、三輪田めぐみ(1989-)は修士課程を今年修了、YUI hayashi(1989-)は2013年に大学を卒業、吉井愛は2007年から大阪、京都、東京を横断する。一色は12点、三輪田は6点、YUIは11点、吉井は3点を出品した。

一色(左下)の作品は、これまでのOn the Stepsで見たことがある。祖父母を介護し祖父母の在り方を描き続けてきたが、介護は終了し、今は海を描いている。一貫して心象風景を描きながらも、客観性を保持する不思議な視点である。そして描かれた対象に自己が宿っている。「描く」という行為の困難に、果敢に挑戦する姿が美しい。

ステップスでの個展を終えたばかりの三輪田(右下)は更なる新作を発表した。小品であるとしても、描かれている世界観は拡張し続ける。見えるものを見えなくする、見えないものを見るようにするといったある種の法則を

形成せず、見る者に委ねている感触が面白い。自由自在に展開する作品群の今後も楽しみとなる。

私は初めてYUI(右上)の作品を見る。写真を加工していくのであるが、そこから導き出される空間性の強烈な主張が目を引き。石膏、セロファンによる蝶まで貼り付けていくのだが、着色しただけの作品のほうが空間性が強調される。広大な画面に包まれると、YUIは写真を写真以外の素材として使用していることに納得がいく。

吉井(左上)は苺に自らが埋没する姿を描き続けている。今回はストロベリー・ワッフルに限定した。支持体もワッフル同様に円はあるのだが、私はワッフルと自己が映る鏡を描いているのではないかと推測する。すると吉井の作品には、ある種の徹底的な客観視が前提になる。ならば描かれているのはワッフルでも自己でもなくなる。

四人に共通するのは、容赦ない自己の消却であると言えよう。この勇氣にこそ、現代美術の未来が託される。

